
1歳6ヶ月児健康診査における コミュニケーション行動の遅れに関する項目分析

山根律子

I はじめに

知的発達の障害や自閉症の早期発見をねらいとし、乳幼児健康診査（以下「健診」とする）には複数のコミュニケーションの成立に関連した項目が含まれている。これらは、言語獲得に関する心理学的研究を基礎に設定されており、近年では、指差しをはじめとする前言語期の行動指標から、言語理解、言語表出に関する項目を含み、さらにその周辺領域である人への関心、模倣性、基本的な概念理解や象徴遊びまで、幅広い項目を採用しているところが増えた。

健診では、これらの項目の通過、不通過を指標として発達上のリスクについての1次的なスクリーニングが行なわれる。これらのコミュニケーションに関する健診項目が不通過である児の中には精神遅滞、自閉症等の継続する発達障害を示す児が含まれる。しかし、実際には1歳6ヶ月の段階でことばの遅れが観察された場合でも3歳までに追いつくものも少なくない。小泉（2000）は、1歳6ヶ月児健診でことばに関連する遅れが見られた児を6年間フォローし、健診時に発語が2語以上定着していないだけの児のみでなく、コミュニケーションに関するいくつかの項目に該当するものでも約9割が正常化してことを報告している。このように、1歳6ヶ月時点で言語やコミュニケーションに関する発達の遅れがみられる群では、障害というよりも、遅れてことばが習得される児が多く見られる。

ことばが使用されるまでには、言語のもつ音韻論的側面、意味論的側面、統語論的側面、語用論的側面のそれぞれの基礎が準備されていなければならない。身体的側面では、音声言語を表出するために呼気の調整や口腔の微細運動制御の発達が必要であり、聴覚・運動面では語音を聞き分け、聞いた音を記憶し、音の連鎖として構音運動に置き換えるプロセスの習得が必要である。同時に、認知面では知覚の発達を基礎にものごとの表象を獲得し、表象と符号との関係づけによりことばとその意味とが獲得される。ことばの習得の基礎には、ことばの意味に相当する適切な概念表象を形成でき、表象を符号が代表するという関係を理解することが必須となる。さらに、ことばは人と人との関係の中から習得するものであり、対人相互作用の成立がその基礎となる。このようにことばの出現には多くの要因が関与し、いずれかの発達が遅ければ結果としてことばの遅れが生じると考えることができる。健常児を対象とした言語習得研究では、言語が習得されていく過程には個人差がみられることが指摘されている（Shore, 1995）。しかし、これらの差がことばの習得にどのよう

な影響を与えているのかは未だ明らかではない。

子どもの言語習得は同一の過程を踏むものではなく、それぞれの子どものもつ認知発達特性、身体・運動的発達特性に応じた過程を踏んで、言語は習得されていくと予想される。一般的な標準に比べてことばの遅れを示す子どものなかには、より遅くことばが習得されるような個性があるものと考えられ、個々の持つ個性の結果として言語習得の遅れをとらえることができよう。

そこで本研究では、1歳6ヶ月児健診でことばとコミュニケーションに関する項目に不通過がみられる子どもが示す不通過項目相互の関係を分析することにより、ことばの遅れにかかわる言語習得過程の個人差について検討を行うための資料を得ることを目的とする。

II 方法

(1) 対象児

A町における平成11年6月から平成14年5月までに実施した1歳6ヶ月児健診受診児を対象とし、この中から健診時の年齢1歳6ヶ月・1歳7ヶ月以外のもの、両親あるいは両親のいずれかが日本語を母国語としないものを除外した。対象児総数は、1006人である。

(2) 手続き

乳幼児健診前に問診表が郵送され、保護者がこれに記入して健診に持参する。健診時に、保健師が個別に問診表の記述内容について確認を行い、必要があれば修正した。

この問診表から表1に示したコミュニケーション関連項目を分析対象項目とした。

(3) 結果の分析

対象児から、表1に示す項目に1つでも不通過がみられた児（以下「不通過児」とする）を抽出し、表1の各項目の通過・不通過の組み合わせを分析した。

表1 使用したコミュニケーション関連項目

①おとなのまね；髪をとかすなど大人のすることをまねしますか
②いいつけの理解；簡単ないいつけを理解して行動しますか (たとえば「新聞をもってらっしゃい」というと持ってくる)
③表出語彙；ママ・ブーブなど意味のあることばをいくつか話しますか 例 ()
④絵本の指差し；絵本のなかで知っているものを指で差しますか
⑤要求の指差し；欲しいものを指差して伝えますか
⑥叙述の指差し；何か気がついたものや見つけたものを指差して伝えることがありますか
⑦人への関心；周囲の人やほかの子どもたちに関心を示しますか

(；印以下が健診票の質問項目として記載されたもの)

Ⅲ 結果

1. 全対象児の状況

(1) 男女比

1006人中，男児が509人，女児が497人で，男女比は1：0.97であった。

(2) 未熟児・低出生体重児数

37週未満出生が51人（不明17人），出生時体重1500g以上2500g未満が76人，1000g以上1500g未満が7人，1000g未満が1人，不明が9人であった。

2. 不通過児の状況

(1) 不通過児数

いずれかの項目で不通過があった児は114人であり，全対象児の11.3%であった。

(2) 男女比

男児79人，女児35人であり，男児が約7割を占めた。男児は全男児数の15.5%，女児は全女児数の7.0%に当たった。

(3) 障害および障害リスク児と低出生体重児の数

不通過児114人のうち，21人が1歳6ヶ月までの時点で障害名が確定している児と疾病治療後に発達への後遺症がみられた児，2500g未満の低出生体重児に該当した（表2）。このうち13人は1項目のみの不通過，3人が2項目不通過児，2人が3項目不通過児，3人が4項目以上不通過児であった。聴覚に障害のある児はいなかった。

3. 項目別不通過数

各項目別の不通過人数を表3に，それぞれの項目が単独で不通過であった児の人数を表4に示す。ひとつの項目だけが不通過であった児数は74人であり（表4），不通過児全体の65%にあたった。

項目別に見ると，全対象児中いくつかの意味のあることばを使用していない「表出語彙」の不通過がもっとも多く，全調査対象児の7%，不通過項目がある児の62.3%にあたった。そのうち「表出語彙」のみの不通過児が46人と不通過項目があった児の総数の40%を占めた。次に「絵本の指差

表2 障害および障害リスク児と低出生体重児数

出生時体重	1500g以上2500g未満	11人
	(37週以上5人・32週3人・35週1人・36週2人)	
	1000g以上1500g未満	1人(31週出生)
	1000g未満児	1人(26週出生)
1歳6ヶ月までに明らかな疾病・障害		
	ダウン症2人、小頭症疑1人、結節性硬化症1人、先天性脳腫瘍1人、硬膜下血腫1人、口唇口蓋裂1人、心疾患1人	

表3 項目別不通過人数と不通過率

おとなのまね	いいつけの理解	表出語彙	絵本の指差し	要求の指差し	叙述の指差し	人への関心
7 (6.1%)	29 (25.4%)	71 (62.3%)	47 (41.2%)	16 (14.0%)	13 (11.4%)	6 (5.3%)

表4 項目単独の不通過人数と2つの不通過項目組み合わせ別人数

	おとなのまね	いいつけの理解	表出語彙	絵本の指差し	要求の指差し	叙述の指差し	人への関心
おとなのまね	[1]						
いいつけの理解	0	[7]					
表出語彙	1	2*	[46]				
絵本の指差し	0	5	7**	[18]			
要求の指差し	0	0	1	1	[0]		
叙述の指差し	0	1	0	1***	0	[0]	
人への関心	0	1	0	0	0	0	[2]

([])内は単独不通過人数、*うち1人ダウン症児、**うち1人は口唇口蓋裂児、***うち1人心疾患児

し」項目で不通過児が47人と多く、そのうち「絵本の指差し」のみが不通過であった児が18人（不通過項目があった児の16%）、次いで「いいつけの理解」不通過が29人おり、そのうち「いいつけの理解」のみが不通過であった児が7人（不通過項目があった児の6%）であった。ひとつの項目のみが不通過である場合には、この3つの項目で96%を占めた。

4. 複数不通過児の項目間の関連

(1) 2項目不通過児の不通過項目の傾向

不通過項目が2つあった児は20人おり、2項目の組み合わせでは、「絵本の指差し」と「表出語彙」の組み合わせが7人、「いいつけの理解」と「絵本の指差し」の組み合わせが5人と多く、他には「いいつけの理解」と「表出語彙」の組み合わせが2人、他の組み合わせはいずれも1人であった（表4）。

(2) 3項目以上不通過児の不通過項目の傾向

2項目以上に不通過があった児の不通過項目の組み合わせを図1に示した。3項目以上不通過であった児は20人あり、うち6人が障害あるいは障害リスク、2人が低出生体重児であった。3項目が不通過であった13人の不通過項目を見ると、2項目のように特定の組み合わせに集約されず、組み合わせは多様であった。1項目不通過児同様に「いいつけの理解」「表出語彙」「絵本の指差し」の不通過が多かったが、さらに「要求の指差し」「叙述の指差し」のいずれか不通過に13人中10人が該当した。

4項目の不通過児は2人おり、1人は全体での不通過がもっとも多い「表出語彙」を通過していた。5項目以上の場合には、「人への関心」を除く全般的な不通過がみられた。

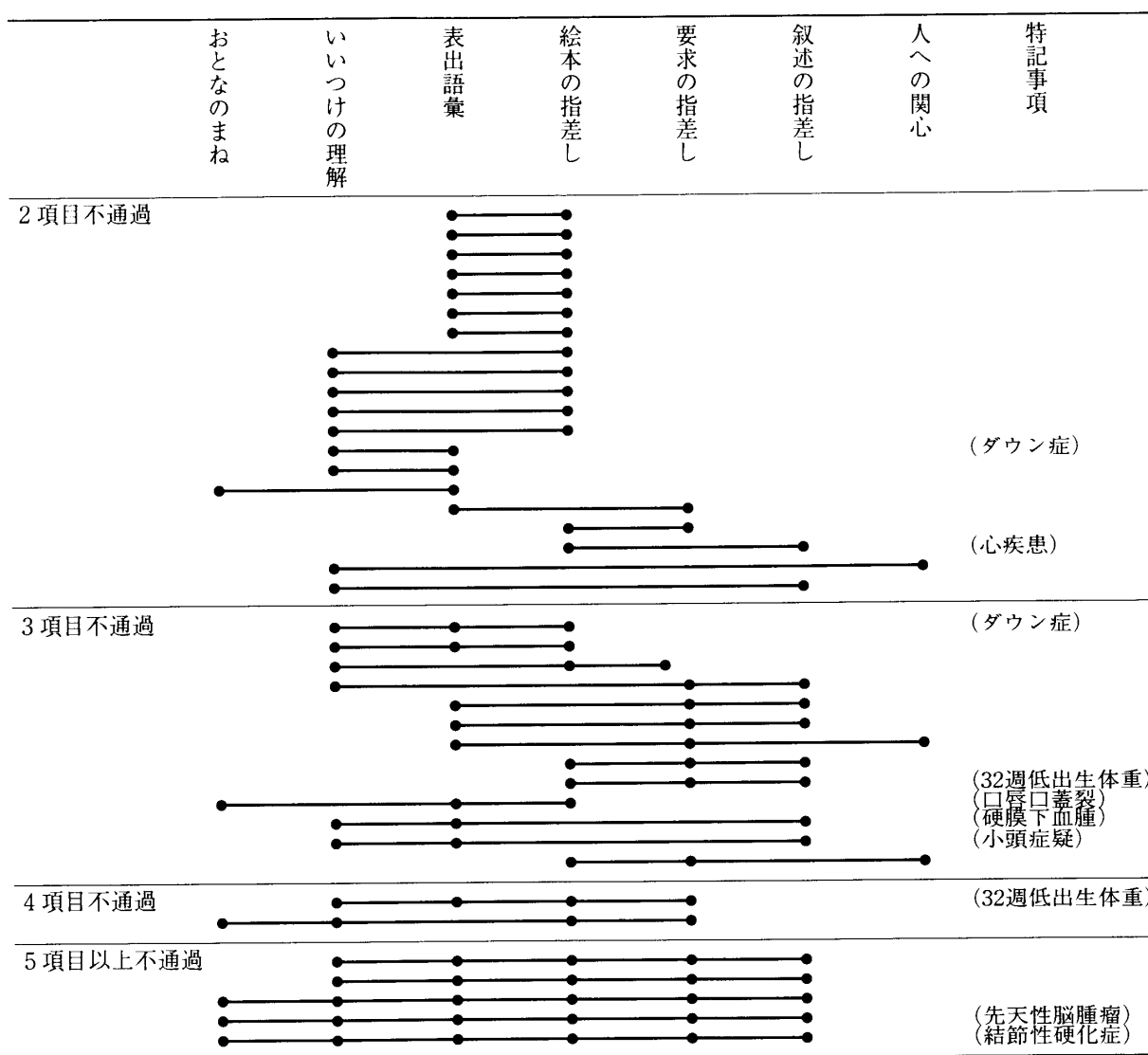


図1 2項目以上不通過児の不通過項目の関係

(3) 不通過項目間の関連パターン

2項目不通過児では、最も多かった「表出語彙」と「絵本の指差し」不通過児では「いいつけの理解」は通過し、「いいつけの理解」と「絵本の指差し」が不通過であった児では「表出語彙」が通過し、「表出語彙」と「いいつけの理解」の組み合わせは少なかった。

3・4項目が不通過であった15人について、不通過項目にそって分類したものが図2である。「要求の指差し」「叙述の指差し」のいずれかあるいは両方が不通過で、「表出語彙」も不通過であったものが6人、「要求の指差し」「叙述の指差し」のいずれかあるいは両方が不通過で、「表出語彙」は通過であったものが6人、絵本の指差し以外の指差しの不通過は無く、「表出語彙」は不通過であったものが3人であった。これらの14人について「いいつけの理解」をみると、いずれの群にも通過、不通過児があり、統一した傾向はみられなかった。また、指差し不通過、表出語彙不通過児では、他の指差しが不通過であるにもかかわらず、「絵本の指差し」は通過している児が多かった。

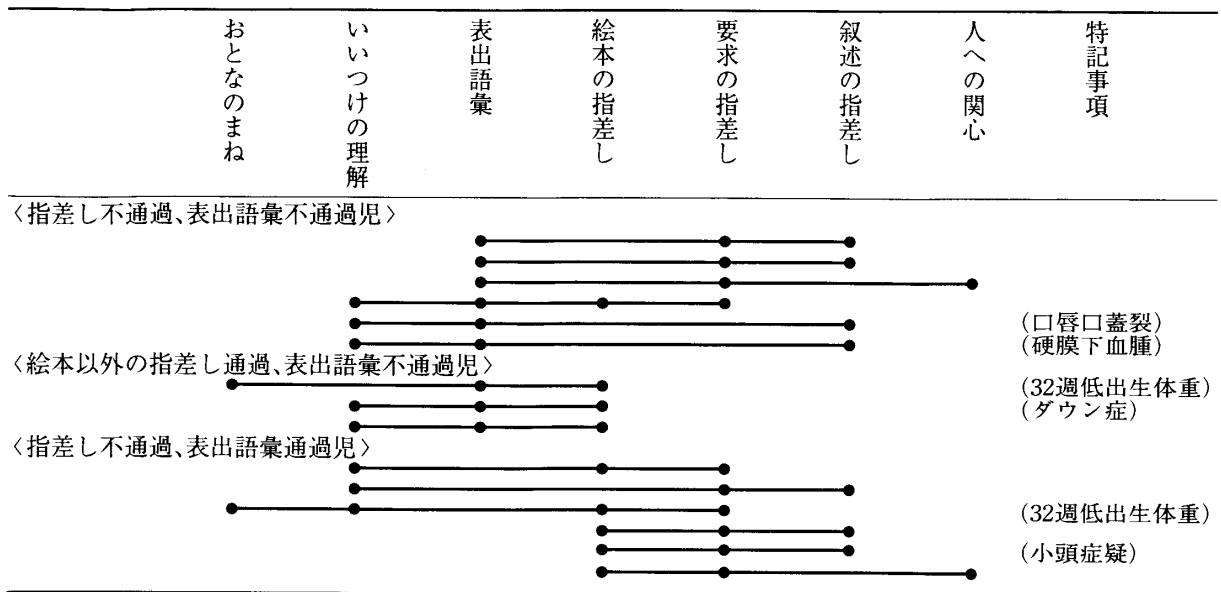


図2 3・4項目不通過児における「表出語彙」「指差し」「いいつけの理解」の関係

IV 考察

1. 全体の傾向

1歳6ヶ月児健診時点で、本調査で使用したコミュニケーションに関する項目に不通過があった児は全体の約1割強にあたり、7割が男児であった。従来からことばの遅れは男児に多いことが指摘されているが(Rescorla & Alley, 2001)、全般的なコミュニケーション項目を指標とした本調査でもこの傾向は同様であり、女兒に比べ明らかに男児にこれらの遅れが多くみられることが確認された。不通過項目のあった児の約65%はひとつの項目だけが不通過であり、これらの児は全般的な精神発達の遅れによる不通過とは考えにくく、半数以上は個々の特性を反映したごく限定された遅れの状態と予想される。

一方、複数の項目が不通過であった35%の児では、その35%中の約18%が2項目、約11%が3項目、4項目以上が約6%であった。多項目の不通過は特定の領域の個人差を越えた何らかの持続する発達の遅れが予想されるが、本調査で用いたコミュニケーション項目では、1歳6ヶ月児健診対象児の約0.7%が4項目以上の不通過に該当し、何らかのコミュニケーションに関する発達に遅れが予想される結果であった。ダウン症児は4項目以上の不通過には該当しなかった。

2. 不通過項目の関係

本調査結果は、保護者の認識に基づいたものであるため、実際の子どもの状態を必ずしも正確に反映していたものではない。また、項目に記述された内容をどう理解するかも保護者により異なると予想され、誤差の大きいデータと考えられる。しかし、誤差の大きさを考慮しても、まず多くのサンプルから全体の傾向を把握することは意味があると考え、誤差を踏まえた上で不通過項目にお

ける全体傾向を分析する。

全体傾向として見たときには、いくつかの傾向がみられた。ひとつは、少数項目に不通過を示す児では、不通過項目は、「表出語彙」「いいつけの理解」「絵本の指差し」の3項目に集中していた。その他の項目は、複数の項目が不通過である児に見られ、不通過項目が多い児ほどこの3項目以外の項目が不通過であった。2つめに、「絵本の指差し」以外の指差し項目の不通過は、2項目までの不通過児には少なく、3項目以上の不通過児に多く見られた。3つめには、「表出語彙」の項目は、4項目不通過である場合でもこの項目が不通過である児と通過である児とが見られ、不通過数が多ければ「表出語彙」が不通過なわけではなく、通過か不通過かに個人差がみられた。

不通過項目の多少がもつ意味を考えると、重い障害が予想される児では多くの項目で不通過であったことから示唆されるように、不通過項目が少なければ遅れは限定されたものと予想され、不通過項目が多ければ発達の全般的な遅れがあり、その結果多くのコミュニケーション行動にも遅れが生じたものと考えられる。このことからひとつめの傾向を見ると、遅れが小さいあるいは限局された場合には「表出語彙」「いいつけの理解」「絵本の指差し」が不通過となり、遅れがより大きいとその他の項目にも不通過が生じると考えられ、この3項目が1歳6ヶ月の発達段階で習得にばらつきのある大きな項目と考えられた。

この3項目の不通過傾向を全体としてみると、「表出語彙」すなわち「意味のあることばをいくつか話す」だけが不通過であった児がもっとも多く、全不通過児の約4割は「意味のあることばをいくつか話す」という表出性言語の使用に限定された遅れと考えることができる。他方、ひとつの項目だけが不通過である児で、他の項目だけに遅れが生じる児もあり、「絵本の指差し」のみの不通過児が全不通過児の16%、次いで「いいつけの理解」が6%であった。これらの3項目は、それぞれ別個に不通過児がいたことから、1歳6ヶ月の段階では、音声言語の表出の遅れだけを示す児だけでなく、音声言語は使用していても「絵本の指差し」がみられない、あるいは「言いつけの理解」がなされない児の存在が示された。「絵本の指差し」は、絵を指すという行動の出現は早いですが、絵本の中のものを問われて指し示す応答の指差しはより発達的に後で出現すると指摘されている（秦野，1983）。本調査項目が「絵本の中で知っているものを指で指しますか？」という曖昧な表現であったため明確ではないが、1歳6ヶ月ではこの指差しが安定使用されていない児が少なくない項目であったかもしれない。「いいつけの理解」は、津守・稲毛式乳幼児発達検査では15ヶ月水準項目に設定されており、標準的発達では比較的早い時期に通過するはずの項目である。しかし1歳6ヶ月段階で、不通過項目数が少ない子どもの多くにこの項目の不通過が見られたことは、この項目の不通過が言語の理解ができないのではなく、聞こうとしない、従おうとしない児の特性を反映した可能性も考えられる。

2つめに見られた傾向として、不通過項目が3項目を超える児で、「絵本の指差し」以外の「要求の指差し」、「叙述の指差し」項目が不通過となる児が多くなる傾向があった。すなわち、3項目以上不通過項目がある群では、「絵本の指差し」よりも標準的にはより早い時期に使用される「要求の指差し」や「叙述の指差し」も習得されていない児が多く、指差し行動の使用全般にかかわる遅れをもつ児が含まれていた。一般的に指差し行動の出現は表出言語の使用に先行することが示されて

いるが、これらの指差しの遅れを示す児が、必ずしも単一の項目だけが不通過であった児が多かった。「表出語彙」「いいつけの理解」「絵本の指差し」の3項目も不通過なわけではなく、全般的な指差し行動の遅れが見られる児は「表出語彙」「いいつけの理解」「絵本の指差し」も通過しないという順序性は必ずしも生じていなかった。

3つめの傾向は、「表出語彙」の通過、不通過にかかわる個人差についてである。本調査結果からは、不通過項目が多い児でもこの項目を通過している場合があった。指差し同様、「いいつけの理解」が不通過であっても、「表出語彙」が獲得されている児がおり、指差しの遅れがありながら表出言語が見られている群があること、表出性の言語使用はみられるが簡単な指示を理解して行動する行動が遅れる群があることがわかる。これらの結果から、1歳6ヶ月時点では表出言語の遅れは、指差しの使用の遅れや指示理解と比較的独立に生じることが示唆された。三宅(1983)は、1歳6ヶ月で遅れを示した児の追跡調査を行い、表出語彙の獲得と「可逆の指差し」の獲得には順序性が無いとしたが、本結果もこれを支持するものであった。自閉症児では、指差しに先立ち表出性の言語が使用されることが指摘されているが(小泉・薄田・今成・高波, 1985), この調査結果からも表出語彙の獲得の遅れに概当せず指差しや「いいつけの理解」の遅れに該当する児が少なからず見受けられた。しかし、これらの児は「人への関心」「おとなのまね」が見られないわけではなく、明らかな自閉性がみられない場合にも同様の傾向が生じる可能性を示唆した。

V まとめ

1歳6ヶ月段階でのコミュニケーション行動の遅れでは、約4割は表出性の言語使用に限定された遅れであった。その他に、いいつけを聞いて行動することと、絵本の指差しが遅れる場合が多く見られた。多くの項目で通過していない児では全般的な発達の遅れが予想された。しかし、それ以外のいくつかの項目に遅れを示した児では、「人への関心」に遅れを示さないにも関わらず、いいつけを聞いて行動することや指差し行動に遅れを示しながら表出性の言語の獲得に遅れを示さない群があることが示された。

そのようなタイプの遅れは、表出性の語彙獲得の遅れとは異なった遅れの原因が予想され、個々の発達上得意とする領域と不得意とする領域の差が表出性の語彙の先行、遅行という差を生んだものと推測される。本調査は健診というデータの性質上信頼性が低いため傾向を把握するに留まるが、初期の言語発達では言語習得にかかわるコミュニケーション項目の習得パターンには個々の特性があり、それらがことばの遅れと関わる可能性を示唆した。今後、発達を追った個別的で詳細なデータによる検討が必要である。

(やまね・りつこ 社会福祉学科)

文献

- 1) 秦野悦子 1983 指差し行動の発達の意義, 教育心理学研究, 31, 70-79.

- 2) 小泉毅 2000 1歳半健診における発達障害リスク児の早期発見から6歳までの地域ケア・フォローの試みおよびADHDの入学後の予後調査, 小児の精神と神経, 40, 111-119.
- 3) 小泉毅・薄田祥子・今成京子・高波厚子 1985 言語遅滞児の1歳6ヶ月健康診査における早期発見=早期ケアの試み〔I〕, 小児の精神と神経, 25, 145-155.
- 4) 三宅篤子 1983 話しことばの獲得前後の発達の諸問題—関連諸行動の機能連関の縦断的分析—, 障害者問題研究, 34, 28-39.
- 5) Rescorla, L. and Alley, A. 2001 Validation of the Language Development Survey (LDS): A Parent Report Tool for Identifying Language Delay in Toddlers, Journal of Speech, Language, and Hearing Research., 44, 434-445.
- 6) Shore, C. M. 1995 Individual Differences in Language Development, SAGE Pub. Inc. Thousand Oaks · London · New Delhi.

Analytic Approach to Checklists for Communicative Delay at 18 months

Ritsuko Yamane

A developmental screening test that includes 7 communicative items was administered at the age of 18 months and ones who showed delay in more than one of the 7 items were singled out. 114 children out of 1006 children did not pass at least one of the 7 communicative items. 40% of them showed delay in only “expressive vocabulary” and many of the others showed delay in “pointing using a picture book” or “following easy linguistic instructions.”

The combinations of the items that showed delay were analyzed. The results showed that at 18 months the use of pointing does not always appear before expressive vocabulary is acquired. From the results, it was suggested that there was individual differences in the process of early language acquisition.

Key Words: screening test, communicative checklists, language delay, individual differences